

「のぞきからくり」の地獄絵

根 井 浄

はじめに

長崎県島原半島の中央に、地獄や温泉観光地として知られる雲仙岳（普賢岳）がそびえている。その島原半島山麓の西部に深江町があつて、当地に「のぞきからくり」が遺存している。「のぞきからくり」は屋台箱の裏に数枚の絵を吊るして順次に転換し、前面の台に嵌め込まれたレンズ眼鏡（穴）を通して絵を覗き見せる大道芸である。絵の説明は竹の鞭で台を叩いて拍子をととり、巧みな口上をもつておこなわれた。大かた昭和十年代まで日本各地で見られたが、現存する例はきわめて少ない。小稿では深江町に伝わる「のぞきからくり」の地獄絵と口上の紹介を兼ねて、日本仏教史上における絵解き文化、唱導文化の古態性や変容性を追究する機会としたい。

深江町「のぞきからくり」の概要

長崎県深江町の「のぞきからくり」は、明治生まれの浜本

住太郎とエン夫婦が伝承していた。住太郎は四国出身とか四国巡礼後に深江町に定住した、とかいわれるが、詳細はあきらかでない。演題と節回しは中川チヨノ氏（平成十三年・九十四歳）と高原数男氏（平成十三年・七十六歳）が記憶していた。これらを北岡静壽氏、水田博士氏、尾ノ上範男氏三人が中心となり平成十年に復興された（現・深江町のぞき文化財保存会）。浜本夫婦が使用していたカラクリ絵が奇跡的にも発見され、現在、深江町教育委員会に保存されている。画題は「島原お糸物語」「地獄極楽」、そのほか「看板絵」である。口上歌は「島原お糸物語」「八百屋お七」「武夫と浪子」が前記の中川チヨノ氏、「地獄極楽」「広島先生と生徒の物語」が高原数男氏によつてほぼ完全に伝承されていた。加えて口上歌には「長崎ピストル事件」「彼岸団子毒入物語」「継子殺し」などがあつたという。これらの演題は近代の社会構造、倫理観にそぐわない一面があり、次第に失念されていった。だが「島原お糸物語」「地獄極楽」「八百屋お七」「武夫と浪子」「広

「のぞきからくり」の地獄絵（根 井）

島の先生と生徒の物語」の五曲が演出可能であり、近年には「平成新山物語」（普賢岳噴火）が新作として加わった。節回しは昭和初期の演出者であった浜本住太郎の口上を継承したもので、地元では四国節と呼んでいる。現今では地元寺社の縁日・祭礼日はもちろん、施設慰問公演、県内のほか各地でも出張公演活動が続けられ、ことに平成十六年十月十日、十一日の大阪四天王寺での公演には多くの人々が見学に訪れ殷賑をきわめた。

「のぞきからくり」の歴史資料

「のぞきからくり」を要領よく説明している文献に『守貞謾稿』（『近世風俗志』）がある。幕末に喜多川守貞がまとめた本で、次のようにある。

覗機関 のぞきからくりと訓ず。京坂にては下略してのぞきと云ひ、江戸にては上略してからくりと云ふ。三都ともに、神祭の日あるひは諸仏の縁日には、社頭および寺院の境内、その他往来繁き路傍に荷ひ出し、児童にこれを観せ錢をとる。下図のごとく、正面の絵は看板と云ひて代へることなし。背に紙張りの箱ありて、この中に絵五、六枚釣り、左右二人各互に演説し、前の絵より次第に紐をもつて引き上げ、次の絵を見せるなり。

前の腰に数ヶの穴あり。穴には硝子を張りたり。この穴より覗き観るなり。江戸にては四銭なり。稀には八文の物あり。覗機関の

絵に専らとするものは、お七吉三恋緋桜、お染久松妹背門松、お半長右衛門桂川恋柵、石川五右衛門釜ヶ淵、女盜賊三島お仙、忠臣蔵。

『守貞謾稿』は右の本文のほかカラクリの挿絵を収載しているが、本文によって江戸では見物料が四銭、演題として「お染久松妹背門松」を含む六題を紹介している。

比較的早い「のぞきからくり」の絵画史料として貞享二年（一六八五）の園果亭義栗画「文字ゑづくし」がある。カラクリ箱は人間一人分ぐらいの四角箱で、上部には採光取りとして障子が貼られ、左側面には七本の紐が下がっている。奴風の男がその紐を操作している場面である。箱の中がどのような構造であり、どのような絵が掛かっていたのか、それはわからない。いや絵ではなく、後述するように箱の中は紐で動かす人形であったかもしれない。

次いで「のぞきからくり」の口上について近松門左衛門は、浄瑠璃「冥土の飛脚」の中で「すめる世の、掟正しく、畿内、近国に追手かゝり、中にも、大和は生国とて、十七軒の飛脚問屋、あるいは順札、古手買、節季候に化けて、家々をのぞきの機関、鉛売りと、子供に鉛ねぶらせて、口をむしるや罌の鳥、網代の魚のごとくにて、逃れがたなき命なり」と書いている。すなわち、忠兵衛と遊女梅川の二人が駆け落ちし、その二人を仲間たちが追い捜す一節であるが、仲間たちの扮

装として「のぞきの機関」を職とする人物を書き挙げている。十七世紀末から十八世紀初頭に確実にカラクリの職人が台頭していたことになるだろう。増穂残口も正徳五年（一七一五）『艶道通鑑』（巻四）で当時の風俗を描写するなかで「のぞきからくり視機関」を挙げている。

江戸近世社会に現れた「のぞきからくり」は絵本の中にも多くを見いだすことができる。享保十五年（一七三〇）長谷川光信画『絵本御伽品鏡』には子供三人が「のぞきからくり」に興じる絵がある。カラクリ台の右側には箱から出た紐を操作する一人の男があり、台上の看板絵には男が象を引き連れ歩く絵があり「大からくり」と書いてある。とすれば、箱の中にはカラクリ象が仕掛けられていたのであろうか。象は当時としては珍しく、外国からときおり輸入、献上されたという。享保年間の風俗図としても注目できる。そして、この絵画には「のぞき／のぞきを見るハ若輩らしけれど／女中の笠の内そ目がゆく」という狂歌がある。

同じく長谷川光信画『絵本家賀御伽』にも「のぞきからくり」の光景画がある。宝暦二年（一七五二）の絵本である。カラクリ台の上には採光装置として障子を貼った格子型の四角箱があり、縦縞の着物姿の男が子供たちに早く中を覗くように勧めている絵である。詞書に「名所を見せるのぞき／京色をたつた一目にみたるとは／のぞきの中の山河やいふ」とあ

「のぞきからくり」の地獄絵（根井）

る。箱の中には京の都の景観図が掛けられていたのであろう。

西川祐信画『絵本東童』には、やや大型のカラクリ箱を操作している一画がある。箱の左側に男があつて右手は太鼓を打ち、左手は紐を操っている。箱の右側には編笠をかぶった女性があり、彼女は三味線を弾いている。そうした「のぞきからくり」に子供たちは物を忘れたように、真剣に大きな穴をのぞき込んでいる光景である。看板絵には二人の胸から「心」という文字が飛び出して一緒になった相思相愛の男女の姿が描いてあり、「おそめひさまつ（角書）／心中大からくり」と書いてある。いうまでもなく歌舞伎で有名な鶴屋南北作『お染久松色読販』、あるいは歌祭文『お染久松』が演じられていたのであろう。画題として「のぞき／梅が香や千畳敷を箱のうち」とある。「のぞきからくり」に太鼓や三味線の音曲が伴っていたことが理解できる。演者二人は夫婦であろうか、大坂から江戸に向いて「のぞきからくり」を仕事にしているようである。

「のぞきからくり」を描いた絵画史料をさらに紹介しておきたい。喜多川歌麿の浮世絵「風流子宝合」は、碁盤の上に乗せた小型のカラクリ箱を子供二人がのぞき込んでいる絵である。そばには母親が目細くしてほほ笑んでいる。カラクリ箱の袖看板には「大からくり」とあり、看板絵は江戸の風景図のようである。このように家の中でも移動できる小型の

「のぞきからくり」の地獄絵（根 井）

カラクリ箱があり、それは玩具の性格に近い。神戸市立博物館には同種のカラクリ箱があり（39 cm四方）、九州国立博物館には伊万里焼（磁器）のカラクリ（14 cm四方）がある。そのほか「のぞきからくり」を描く絵画史料として、「野曾喜伽羅久里義経山人」（天明四年＝一七八四）、近藤清春画「どうけ百人一首」（寛政五年＝一七九三）、山東京伝の黄表紙「こはめずしいみものおたり這奇の見勢物語」（享和元年＝一八〇二）があり、同じく京伝の「人心鏡写絵」の挿絵には女性の胸中に「のぞきからくり」の絵がある。加えて十返舎一九『金儲花盛場』（天保元年＝一八三〇）の挿絵（歌川安秀画）にも「のぞきからくり」絵がある。明治時代には清水清風画『街の姿』、宮川春汀画「有喜世之華」のお祭り風景、岡本昆石著『古今百風 吾妻余波あづまのなごり』（明治十八年＝一八八五）、山本松谷画「のぞき台」（『風俗画報』明治二十八年＝一八九五）などがある。

竹田芝居と「のぞきからくり」

宝暦年間（一七五二～六三）ごろの作品という『絵本遊君女郎花』には筆笥大のカラクリ箱を覗く女性の絵がある。二個の覗き穴がついている。箱を操作しているのは深編笠の男である。箱の上には看板絵が立て掛けられ、扇子を手にした人形絵が描いてある。そして「大坂下り／竹田からくり」の文字が読める。注目できる看板絵である。というのは「のぞき

からくり」の中身が竹田からくり人形であったことを示唆しているからである。竹田人形は竹田芝居で使用されたものである。可動性のある文字どおりカラクリ人形であった。当初の「のぞきからくり」は絵を見せるのではなく、動く人形を箱の中に置いていたのであろう。『絵本遊君女郎花』にみえるカラクリ箱の看板絵には、既述のように「大坂下り」の説明があり、この演者は大坂から出た竹田人形を操る人物であった。

人形を用いた竹田芝居は近世大坂の「からくり芝居」である。寛文二年（一六六二）初代の竹田近江が大坂道頓堀に創設し、明和五年（一七六八）四代目近江によって閉場されたという。その様子は『摂津名所図会』に説明と挿絵があつて有名である。ことに挿絵の説明に「竹田近江機振かき戯場／阿蘭陀が足もかまぬ目で見れば、天地も動く竹田からくり」とあり、日本を訪れたオランダ人一行もからくり人形芝居の精巧な動きに驚愕し椅子から立ち上がって見学している絵図である。このような竹田芝居の盛況と内容について『我衣』の作者・加藤曳尾庵は次のように記述している。

○寛保元酉三月より九月頃迄、大坂竹田近江大塚堺町勘三郎芝居の向ひにてからくり並に子供狂言令見之、表の方左右に竹二本植、額を正面にかける。番附子供狂言住吉をどり。○からくり三寸斗の子供人形指人かぶりをす、指を折て歳を云ふ、小便を放つ。○

五歳斗の子供人形、三味線を弾く、大つまみ小つまみをうつ。○狂言三條小鍛冶四方髪の人形、揚弓を射るからくり。○狂言化物屋敷、くわいらい師の人形からくり、舟弁慶にかわる。○狂言鼠の隠里、道成寺からくり人形。○狂言せわごと。○春日の宮殿灯籠に火をおのずから燈すからくり。○狂言大塔宮。○船のからくり、蟻通のからくり、右貴賤老若群集す、初日より三日の間、あまり人多き故、木戸を閉て不入。

竹田芝居は右のように多彩なカラクリ装置の見世物として人気を博した。「のぞきからくり」は、カラクリ人形を箱の中に仕掛けた見世物であり、文字どおり「覗き」「カラクリ」が本義であつたであろう。その点は収集した絵画史料でも推断できるのである。また竹田芝居が衰退すると、その人形は「のぞきからくり」台の上に乗せられるようになり、「まねき人形」として残った。詳細は割愛するが、北尾政美（鵜形蕙斎）の『近世職人尽絵巻』に見える「のぞきからくり」場面、山東京伝の『御存商売物』の挿絵で確認でき、大正年間の伊藤晴雨画「のぞきからくり」にも鬼人形が台上に乗っており、「此人形、竹田カラクリ」と明確に書いている。

地獄絵と「のぞきからくり」

江戸から明治時代にかけて「のぞきからくり」に使用された演目には、有名な歌舞伎や文芸小説や社会的事件を扱った

ものもあつた。だが最も古態性をもつ演題として、俗に言う「地獄極楽」がある。昭和五十五年まで黒田種一氏は大阪で「地獄極楽」を演じており、そのカラクリ台は大阪府豊中の原野農芸博物館に譲られ、やがて鹿児島県奄美大島の同館に保管された。これらの模型版が千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館や大阪歴史博物館に残っている。「のぞきからくり」に「地獄極楽」が演じられていたことは『本朝文鑑』享保三年（二七一八）に「覗からくりの地獄極楽も都是一銭にて善悪を見れば、一刻千金のあそびの中に、巾着摺はいかに見るらん」とあり、全国共通の普遍的な演目であつた、と思われる。

ここに紹介する長崎県深江町に伝わる「地獄極楽」は、その額絵と歌詞があり、また演出可能な文化財となっている。現存する「地獄極楽」の絵は極彩色の七枚である。内容は「閻魔大王・業の秤」「三途の川・奪衣婆」「針の山・餓鬼道」「血の池地獄」「地獄の釜ゆで」「地藏菩薩と賽の河原」「極楽浄土」である。吊り掛けて使用されたので一枚一枚が木の枠が付いた額絵である。制作年代はあきらかでないが、大正から昭和初期の作品と思われる。

「のぞきからくり」に使用された絵画には、遠近法で景観などを描いた「浮絵」、絵柄の中に綿をいれて膨らみを付けた「押絵」があるが、「のぞきからくり」の絵にはもう一つ「透かし絵」があつた。つまり絵像の一部分を切り抜き、その部

分を裏から薄い白紙で貼った細工絵である。後方から光りが当たるとその部分が透きとおり、より立体的、臨場感ができるように工夫されている。裏の白紙には色を塗ることもあった。深江町に遺存する地獄極楽絵は、まさに、この「透かし絵」となっている。例えば「針の山」には小さく三角に、鋭利に針の部分が切り抜かれ、「血の池地獄」の両極にある崖と崖に渡された布橋は長く細く切り抜かれ、裏から白紙が貼られている。実際に後方から太陽や光りをあてると鮮やかな画面が現出する。

「のぞきからくり」に透かし絵が実用されていたことは、十返舎一九の『金儲花盛場』（文政十三年＝一八三〇）に「さあ、さあ、あとが忠臣蔵十一段目、八百屋お七の働き、一の谷合戦の道行、向うに見ゆるが飛鳥山、こなたに安芸の嚴島、これも夜分のていとかわりますれば、提灯松明星の如く、富士の巻狩、玉屋鍵屋の花火が、そうよう様へおいとまごひ、先の方はお替りお替り」と口上を述べており、夜景風景を演出するのに後方から蠟燭、または、なんらかの灯をあてたものと思われる。

深江町に伝わる「地獄極楽図」は、このように「のぞきからくり」の伝統的技術を残している点でも貴重である。それと共に「地獄極楽図」に伴う歌詞（口上）が伝わる点も見逃すわけにはいかない。平成十六年の夏八月、聞き取りに及ん

なので、本誌を借りて全文を公開、掲載する。

一、ソラヤー、聡明なるのは閻魔さん、右と左の兩人を、業の秤に乗せまして、お前は極楽地獄だと、閻魔さまよりさとされて、右と左に別れゆく、チョイトチビく

二、ソラヤー、三途の川に来てみれば、三途の川のダイバ（奪衣婆）さん、娑婆から落ち来る罪人を、この帷子でもぎとつて、川を渡れ渡れと責め立てる、最早渡ろうとするならば、俄に一点かき曇り、あまたの蛇が出でてでる、

チョイトチビく
三、ソラヤー、死出の山路をゆくものは、真つ暗闇の其の中を、灯りも持たずにとぼとぼと、ゆけどもゆけども果てしなく、チクチクと針で刺す、痛さ忍んで登りゆく、これぞ死の山、針の山、チョイトチビく

四、ソラヤー、三途の川や針の山、通り過ごして来たものの、あまりの痛さに耐え兼ねて、今日は仏の慈悲にすがらんと来てみれば、血の池地獄に落される、チョイトチビく

五、ソラヤー、今日は仏の命日と、跡に残りし妻や子が、お供えくれたる仏壇の、オマンマ食べよとするならば、中から炎が燃えて出る、チョイトチビく

六、ソラヤー、賽の河原の子供たち、十歳にたりない幼子が、賽の河原に集まって、一つ積んでは母のため、二つ積ん

では父のため、三つ四つと積むなれば、昼間は機嫌よく遊べども、日ひの入いりあいの其そのの頃ころにや、赤鬼青鬼出て来て、積んだカワラを打ち砕く、チョイトチビく

七、ソラヤー、極楽がたりと行くものは、見渡す限りの花畑、きれいなお船に乗せられて、ハスの蓮はすのふし華はなに座まらして、極楽浄土ごくらくじょうどの城門じょうもんに、送り届けの有り難や、チョイトチビく

「のぞきからくり」の歌詞は河本正義編『覗き眼鏡の口上歌』（昭和10年刊・平成7年復刻）によって知ることができる。本書には「勸善懲惡 今世の誠」と題して「地獄極楽」の詞章が収載されている。深江町「地獄極楽」の口上と共通点もあれば相違点もある。今、その詳細を論じ切れないが、口上は時代や場所によって可変的であり、地域性がみられることを指摘しておきたい。

地獄絵の歴史的背景

深江町に「のぞきからくり」の「地獄絵」が残った歴史的、社会的背景に、雲仙岳の地獄信仰があったことを視野にいれておかねばならないだろう。雲仙岳は山岳信仰の修験の山であり、山内に湧き出る実際の温泉が地獄の幻想と結びついて地獄信仰の山としても知られていた。雲仙地獄はすでに『肥前国風土記』にみえており、仏教の影響をうけてさらに世間

に知られるようになった。江戸時代には、かつて真言系修験であった満明寺一乗院によって管理されていた。近世の「肥前国嶋原温泉山之図」（木版絵図）によると、雲仙地獄として、大叫喚、叫喚、無間、餓盜、殺生、飲酒、等活、邪見、邪淫、妄語、黒熱、黒繩、八万、眷属、飯炊地獄などがあった。また、合戦、不孝、立聞、紺屋、飯炊地獄など、それぞれの業報によって墮ちる地獄や、賽の河原、他界の松、花園山、浄玻璃の鏡、老の坂、三途の川、姥石、死出の山など、まるで地獄世界そのものを現出していた。

雲仙岳の地獄がさかんに唱導されていたさなか、雲仙岳の麓では、また別のカタチで地獄が物解き・絵解きされていた。『島原藩旧記録』天保十一年庚子三月十六日条を掲げておきたい。場所は雲仙岳の南麓にあたる有田村（現〓有家町・深江町の西部）の温泉四面神社である。

一 地獄極楽拵物人形

右、肥後熊本之者持参、此間中、北有馬村ニテ興行致候処、四面宮再建普請取掛候へ者、存外物入多候ニ付、右拵物人形日数七日ニ見セ物興行仕、見物之者ヨリ少々宛出銭申請、再建ニ仕度、有田村願承届候事

一読して判断できるように、地獄の景観をあらわした人形が造られ、その地獄人形劇が温泉四面神社再建のための勧進興行としておこなわれたのである。人形遣いは肥後熊本から

「のぞきからくり」の地獄絵（根 井）

訪れた一団であったようであるが、彼らは北有馬村など島原半島の諸村を巡っていたのであろう。この一団は鎌倉期の面影を残す『遊行上人縁起絵』に描写された地獄人形演出者の再来といってもよい。島原半島の歴史文化を語るとき、雲仙の地獄信仰を無視することはできないのである。

「地獄極楽図」は江戸初期から熊野比丘尼たちによって絵解きされた。絵解対象の作品として「観心十界曼荼羅」「熊野観心十界図」と呼ばれる地獄絵があることは夙に知られている。「地獄極楽」の絵解き詞章は山東京伝が『骨董集』に「今説教祭文と云ものに、不産女ぢごく、血の池ぢごくなど」とであるも、絵解のなごりなるべし」と述べているように、説教祭文にその一部が流れた。地獄語りの説教祭文はまた「のぞきからくり」の口上と不即不離の関係にあり、「のぞきからくり」に「地獄極楽図」が説かれたのも不自然ではなかったのである。なお「のぞきからくり」と「地獄極楽図」の位置付けについては、今後も追究が必要であることは縷言を要しない。

〈キーワード〉 のぞきからくり、絵解き、地獄絵

（龍谷大学教授）

48. The Hell Picture of Nozoki Karakuri

Kiyoshi NEI

Nozoki Karakuri is a street performance. It took place in the 17th century. Spectators watch moving dolls and pictures, and so on, through a glass window in a box. Among the painted pictures, many were drawn from the idea of Buddhist Hell and Paradise. Nozoki Karakuri has been preserved in Fukae town, Nagasaki prefecture. It is one of the cultural treasures of Japanese Buddhism.

49. Religion of Minobusan and religion area in modern period

Shinchō MOCHIZUKI

Minobusan Kuonji-temple is Nichiren's hallowed ground. Nichiren lived in Minobusan in over nine years. Minobusan's hallowed ground was formed in medieval time.

This paper inquires into the time and places of worship in Minobusan region on the basis of their relevant materials.

50. Fujaku's View of the Huayan Thought

Ryō NISHIMURA

Fujaku (1707–1781) was a scholar-monk representative of the early modern period in Japan. He idealized the times of the historical Buddha and as a Vinaya monk practiced the Four-Part Vinaya. Scholarship to date has defined Fujaku as a heretic from the traditional doctrines. Huayan scholars have also criticized Fujaku's Huayan thinking, claiming that he is biased toward practice.

Fujaku considered the five kinds of teaching classified by the Huayan as something practiced by himself over a distance of many lives. The Huayan philosophy has supported his practice from the present time to the time of his becoming a Buddha in the distant future. Fujaku's approach integrates